I N S A N I T Y

咲魔@テラ駆け出しドンだー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＮＳＡＮＩＴＹ

【Ｎコード】
Ｎ１９０４Ｚ

【作者名】
咲魔@テラ駆け出しドンだー

【あらすじ】
とある世界からふたたび帰ってきた青年の笑いあり恋愛ありはたまたシリアスありの日常！
さて、彼にはどんな運命が待っているのか！！
ゆっくりまったりとお送りする咲魔初の一次小説です！！

プロローグなんて無かった（前書き）

あい、初の一次小説です…楽しんでくださーい（＾－＾）／

プロローグなんて無かった

秋吉夜哉は今年で五十歳になるのだが、外見は二十歳の時となんら変わってはいなかった。それは、三十年前、彼は妖怪となったからだ。

しかし、今こうして又しても現代社会に溶け込んでひっそりと、またまったりと人間の側でくらしている。

彼は、戸籍上では死人の扱いである。彼がとある世界に旅立った時、既に行方不明とされ、三十年間発見されず、死んでいるとされたのはつい最近、気まぐれで死亡の偽装をしたからだ。

そういえば、彼が現世に舞い降りたのはおとといの事である。前の世界が、とても清んだ空気が駆け巡っていたので、帰ってきた時は若干噎せた。やはり、科学技術の発達と大気汚染の関係は比例の関係にあるのだろうか。そう思わずにはいられないのである。

彼は今、ゲームセンターに居る。なんのことはない、長年の友人（だと彼は思っている。）が好んで飲んでいたビールを傾けながら、久々のゲームセンターの感覚に酔いしれていたのだ。

代金はどうするのかと思うだろうが、彼は行動が早い。先生という職業に着きたかったが、長年の勉強不足（といっても、頭の良さは健在だが。）と、自身の妖怪化に伴い、それを切り捨て、取り敢えずコンビニエンスストアでアルバイトをすることにした。

彼は、ダンスダンスレボリューションなる音ゲーをしている。まぁ、知る人ぞ知る音ゲーであるのだが。

今のコインで本日五回目になる。

なかなかこのゲームセンターはダンスダンスレボリューションの人気は高く、人が何人か並ぶのだが、並んでるときはビールを飲んでいる。何故か酒臭くならないのは不思議である。

さて、四曲目も終了し、時計を見た。

「やべ。バイトの時間ちけぇ。」

ダッシュでゲームセンターを抜ける。この時間帯は、人が多いのだが、かなりの速度で走ってるにも関わらず、誰一人として接触はしていない。

「あー、やべぇやべぇ。」

余裕の表情で、その言葉はおかしいと思うが。
それはおいといて、ゲームセンターからバイト先までは一キロで、残り時間一分五秒。

「さて、行きますか。」

歩道を駆け抜ける。都会の歩道は、道の幅が広いが、人が多いのだ。スピードを落とさずに、なんなく駆け抜ける。
これだけのスピードで走ってるにも関わらず、誰も感心を寄せないのは、彼が認識阻害魔術を展開しているからである。

「はい、到着。」

五秒の余り。といっても、シフトの五分前であるが。

「こんにちは。シフト交替ですよ。」

「あ、ありがとね秋吉君。」

女子のバイト仲間とシフトを交替し、制服に着替える。流石に着ていた真っ赤の大きなフードつきパーカーはおかしい。

因みに、彼は結構お客さんから好かれる。
というのも、彼は童顔で、男だが、女子みたいな…へたな女子より可愛らしい顔立ちをしているからである。日頃はコンプレックスの源であるので、フードを深々と被っているのだが。

「いらっしゃいませ。」

コンビニに、女子高生二人。俺を見るなりひそひそ話を始めた。だから嫌なんだ…。女顔でアルトの声で中身は男。おかしいだろう…。

まぁ、営業スマイルは崩さんけどな。なんやかんやで、俺も役にたってるわけだし。

さて、彼がレジ打ちを始めて五時間が経過し、もうすぐシフトの時間が終わるくらいの時間のことだった。なんか、いかにも怪しそうな真っ黒いコートに、サングラス、マスクを着けた中年男性が入ってきた。見るからに怪しい。よくみたら、銃をポケットにしまっている。
でも、この手の輩は刺激し過ぎると、かえって危険だ。興奮して銃を乱射しかねないからな。

「おいお前ら、手をあげろ。さもないと撃つぞ！！」

男は行動にでたようだ。
よく見ると、瞳孔が開いて血迷った眼をしている。恐らく薬物中毒者の末期だろう。めんどうだ…。

「おい、そこの女！！金を持ってこい！！」

はて、女は居ないんだが…。

「お前だよお前！！さっさとしやがれノロマ！！」

……どうやら、俺のようだ。穏便にいく作戦変更。ボコる。

「お、お？やんのか女ァ！！銃だぞコラァ！！」

「…中年は黙ってろよ。」

「あぁ！？マジで撃つぞコラァ！！」

カウンターを越えて、男との距離二メートルといったところか。

「秋吉君！！下がりなさい！」

店長の制止も俺には聞こえない。

男の指が引き金にかかると同時に地面を蹴り、鳩尾に蹴りを入れる。

かなり手加減したので一メートルしか飛ばなかった。

「おい、俺が女に見えるかコラ。」

「どけよクソッ！！ヤクが切れてんだよ！！離せ畜生！」

かなり息が荒い上に、薬物の匂いがする…。

不意に、嫌な予感がして、後ろに飛び退くと同時に、爆音が炸裂。

そして、銃弾が俺が居たところを通りすぎた。
速度は普通の拳銃程度だったが、油断していた。二人組だったか…。
片方は、腹を押さえて立ち上がり、拳銃を俺に向けた。もう一人は、客を人質にとっている。
渋々と手をあげて下がった。
やろうと思えば、人質の解放と、二人相手の立ち回りくらいは楽勝なのだが、如何せん現代社会では不可能と思われる行動をとることになるから、俺が色んな意味で怪しまれる。
「へへへ…これでテメェも手を出せないな。」
「……邪魔。」
いきなり人質を持った方の男が吹き飛ばされた。
「加減間違えた。」
「おーい、注目集めてどうする。」
……嫌な予感がするのは俺だけだろうか。どうも、聞いたことある声が二つ聞こえた気がしたのは…。
「あー、すみません。肉まんを三……。夜哉！？えっ…えっ！？」
「あ、夜哉だ。二日ぶりー。」
……間違いないな。
いや、幻聴の可能性がある。無視しよう。

「肉まん三個でお会計は７５０円になります。」

「無視すんな阿呆。」

「……幻聴。」

「咲魔、殴っていいか？」

「ふぇ！？えっと…あー。ゴホン。良いわよ。」

良いのかよ…。

今ので確信したので紹介するが、肉まんを頼んだ方は宇津宮咲魔。

片方は、宇津宮シキ…と名乗ってたな。今もそれで通してるだろう。

確信は無いが。

ふと、視点を移動すると、男二人は気絶しているようだ。

「店長、すみません。あの男二人に救急車と警察お願いします。」

「え、あぁ、うん。わかったよ。」

おぉ、なんか店長パシってるみたいだ。

「秋吉君はもうあがっていいよ。疲れただろうしね。」

「あ、ありがとうございます。」

時給もしっかりといただいて、カウンターを出た。

あ、店長？え？廃棄の弁当くれるの？ありがとう。

「で、なんでお前らが居るんだ？」

本日一番の不思議である。

「きっ…気まぐれよ気まぐれ！ねぇ、シキ！！」

「えっ？あ、うんうん。そうそう。気まぐれ。」

なんだ、気まぐれか。わざわざ結界を越えてご苦労なこった。……ん？そういえば、違和感があると思ったら…。

「二人とも背伸びたか？」

「まっ…まぁ、ね。ちょっとね。」

「変…か？」

変というより、大人びたなと俺は思う。咲魔も髪を下ろしてるし。

「いや、悪くないぜ。」

二人がホッとしたのは言うまでもないのだが。

「お前ら、家はどこなんだ？」

「すぐ近くのアパート。」

すぐ近くのアパートって…俺んちもすぐ近くのアパートだし…アパ

ート一つしかないし…。
まかさな…。

さて、なんやかんやですぐ近くのアパートに着いた。当然二人も着いてきた。
階段を上がる。着いてくる曲がる。着いてくる。扉を開ける。隣の扉を開ける。

「……お隣さん？」

「マジかよ…まぁ、夜哉ん家に遊び行きやすいからいいけどな。」

逃げ出したい気分でドアを閉める。
取り敢えず寛ごうと、ベッドにダイブ。

ガチャ…ガチャガチャ……カチャン。

ん？今、扉が開いた音が…。

「やっほー！！」

「ほぐぉっ！！」

背中に鈍痛が走り、変な声を上げてしまった。
この声も聞いたことあるぞ…。いや、鮮明に覚えている。

「そ…穹。おま…。」

「あれ？夜君どこか痛いの？お姉さんが看病してあげようか？」

「なにがお姉さんじゃ！！俺が年上だ！」

「もう、夜君の意地っ張り。」

水無穹。元は人間だが、二十歳で妖怪になる。元はと言えば、俺が気まぐれで助けた村娘的な奴なんだが…。どうしてこう、なつくかね…。因みに大人になって、胸ばっかりデカくなりやがったし、ショートヘアにしてから若干大人びた。なので、何故か年上の俺を可愛がる。因みに俺が妖怪になったのはギリギリ十九だ。

「うふふ。夜君かわいー。」

なんなんだこいつは…。俺が痛さでもがいてる上から覆い被さるようなかっこうである。端から見たら俺が押し倒されてる風だ。しかもこいつ、風呂上がりなのか、熱いくらいである。

ん？こいつ…まさか…。

「下着じゃねぇか！！」

「あは、今さら気づいたってもう遅い。」

そう、下着なのだ。まさかのブラとパンツのみ。しかも裸足。

「かーえーれー！！」

「いーやーだー！！」

なにが嫌だか…。俺的には…その…素肌を当てられるとこう…理性ってもんが危険に晒されるんだが…。

「「穹あああっ！！」」

俺の家のドアが盛大に吹っ飛ぶ午後七時。ドアの修理どうすっかな…。

「あー、咲魔とシキだー。」

「あーじゃないわよ！！は…早く退きなさい！そして、服を着なさい！！」

「着てるじゃん！！」

「パンツは服じゃねぇ。常識的に。」

うむ、巨乳が頭に押し付けられかつ素肌が引っ付く俺にしてはなかなか冷静なコメントだな。

「パンツじゃないから恥ずかしくないもん！！」

「パンツだろＪＫ。」

シキ、いい突っ込みだ。

「と…とにかく穹は夜哉から退きなさい…。」

「えー、やだー。夜君のお嫁さんは私なのー。」

「俺は痴女と結婚する趣味はねぇよ…。」

やっとのことで穹のホールドから抜け出せた。

はぁ、前途多難だな…。

プロローグなんて無かった（後書き）

わけのわからない日常となりましたが…まぁ、後々展開していきます。
不定期更新は気にしないでくださーい！！
これからも宜しくお願いします！！

職業：魔装探偵！？（前書き）

はい、文章すくなーいｗｗｗ

職業：魔装探偵！？

夜哉ｓｉｄｅ

午後七時。女子（約一名）の痛め付けとも思える過度のスキンシップのお陰で肉体的にも精神的にも過大なダメージを負った俺は、取り敢えず英気を養う為にゲームセンターに向かうことにした。家の近くにゲームセンターがあるので、結構快適である。まぁ、距離はどうにでもなるがな。

そういえばと、宝くじが当たっていたのを思い出して、五百万円を無駄無く稼いでいた。噂では、数学者は、宝くじの当たる確率は、分母が余りに大きすぎるので、当たる確率が二倍になったとか聞いても当たる確率が天文学的数字なので買わないらしい。ちょっとした豆知識。

ここで、毎度毎度宝くじを買っている俗に言う、宝くじユーザーの皆様に心からお詫び申し上げたいのだが、実はちょっとした解析をして居たのだ。どこの宝くじで、何番目に引きにいくと当たるかを解析した結果だ。

まぁ、チートだな。

つう訳で、やたら所持金が多い。

なんだかんだ歩いて十分程度でゲームセンターに到着。閉店は十一時だから長居はできないな…。

ふと、眼をやるとこの時間には珍しく、人が多かった。なんでも、格闘ゲームに人だかりができてる。

それも、片側のみ。

片側はよく見えないが、人が座っている。

画面を注視する。今座席に座ったインドア系の男が乱入した。

そこからは、ある意味リンチだった。

コンボが途切れないのだ。俺は結構このゲームをやるのだが、こんなにコンボを続けるのは至難の業だ。仕様として、コンボが十を越えた辺りからボタンを押すタイミングが若干小さくなるし、上級者でも動きがカクカクになる程操作が難しい。画面のキャラクターは、着地の隙を攻撃でカバーしたり、攻撃の隙を回避でカバーしたりと、動きに無駄がなくなめらかである。

ハッキリ言おう。やりこみ過ぎだろ。

こんな動き出来るのは正直俺だけだと思っていた。

ちょうどダチョウ倶楽部のように変な譲り合いが始まったので、俺がプレイするのは容易であった。

「おもしろい。連勝記録を破ってやろうじゃないか。」

キャラクターを選択する。いつもどうり、ナイフ使いの男。対して、相手は巨大な大剣を持った女。

まもなくバトルが始まった。

開始と同時にダッシュで接近される。

俺は動かずに接近を待つ。

予想道理、緊急回避で後ろに回った相手は、大剣を薙ぎ払った。

絶妙なタイミングでしゃがみ、そのまま上に攻撃を入れる。しかし、そこには既に居なく、技の出の早い蹴りを出してきた。システム的に回避は不可能なので、素直に受け、回数制限のある、ボムと言う範囲攻撃で技の出を潰すと、よろめいてる間にナイフの連続攻撃を入れる。二十コンボ繋がると、絶妙なタイミングで抜け出される。

そこからは、まるで巨剣を携える重量級とは思えないようななめらかな動きで俺を翻弄する。
俺は最大の反射神経を集中させて腕を動かすが、あることが起きた。

「なっ！？処理落ちぃいい！？」

俺のキャラがバグって動けない間になんと連続四十コンボを鮮やかに決め、決着がついた。
周囲がどよめいた。そりゃそうだな。人間にゲームを処理落ちさせる程の速度はだせねぇしな。

「ふいー。やっぱ夜哉は強いね。」

なぬ…。聞いたことある声…てか、あいつだろ。

「なんで居るんだよシキ。」

「いやー、ゲーセンは好きだからねぇ。まぁいいや。一緒に回ろうよ！！」

「ちょっ！！何故手を引く何故！？」

「いーじゃんいーじゃん！！あ…嫌……かな。」

「いっ…いや、別に嫌じゃないが…。」

俺には嫌だと言うことは不可能だ。考えてみろ、背の小さい女の子が上目遣いで俺を見てるんだぞ…あれ狙ってんのかな…。関係ないか。

「なぁ夜哉、太鼓やろっ！！」

「おう。いいぜ。」

そういえば、先程から視線が…。嫉妬と羨望の眼差しを感じる。チラリと振り返ると、男どもが鼻の下を伸ばして食い入るように見ていた。

嫉妬っつっても、俺たちは友達同士な訳で、決してカップルではないぞ。

男どもは、太鼓を叩く度に揺れるシキの胸を見ているのだ。それを見ている女子からの卑下するような視線が注がれているのだが。

さて、太鼓も終わって、ＵＦＯキャッチャーでもしようかと言うところで、ヤンキーみたいな男（所謂ＤＱＮというやつだ）が近づいて、話しかけてきた。

「ねぇねぇ君たちさ、俺と遊んで行かねぇ？」

さて、シキがナンパされました…ん？君たち？

俺も入ってんの？まさか…な。

「あ…あはは。お兄さんそれ爆弾投下。」

「え？お嬢ちゃん達遊ばない？」

「お兄さん命は大事にね…。」

「へ？」

怒りは頂点に達した。今こそ狩る頃合いか。

「……俺は男だ。」

赤の目…妖怪の目になる。普段は苦労した末、黒の目になれるようになった。

赤の光る目を直視した男は恐怖で足がガタガタと震え始める。

「は……はひっ！！」

目を黒に変化させる。

「まぁ、ナンパする相手は選べよ。」

「す……すみませんでした！！」

すたこらさっさと逃げるように去っていった。

まぁ、あの程度ならそこまでキレないわな。今のは脅し程度だし。

というか、俺が仮に女子だとしても、女子二人同時にナンパとは、どんだけ欲求不満なんだろう…。考えちゃ駄目か。

ＵＦＯキャッチャーは苦手なんだ…取り方がわからない。いい感じにはまってもアームがゆるゆるだからすぐ取り落とすんだよ。

結局俺は下手すぎて何も取れなかったが、シキは大きなぬいぐるみを取っていた…五百円で。

んで、もちろん俺が荷物持ちな訳である。

景品が大きすぎたので、このままゲームをし続けるのもアレなので、

帰ることにした。

とくにどうという事もなく帰宅。

ガチャリ

「お帰りなさい！！私にします？私にします？それともわ・た・し？」

バタン
ガチャリ

「お帰りなさい私に（ｒｙ」

バタン

俺は見てはいけないものを見てしまったようだ。

「いやん、夜君のいけずー！」

ツッコミ所は満載である。

まずは、……。

「選択肢が無い。」

「一個だけあるよ？」

一個だけなんざ選択肢に入らん。

「遊んでないで入ってきて夜哉。」

咲魔すら勝手に家に上がる始末である。鍵は掛けたはずなんだがな。

仕方なく穹のハグを回避して入っていくと、後ろからシキが、先ほど取った巨大なぬいぐるみを抱えてきた。

「で、状況説明するんだけど…。」

おぉ、なんて優しい。今まさに俺が聞きたいことが状況説明なんだ。でも、その前に。

「穹、下着は止めようぜ？」

「着てるよ。」

薄手のカッターシャツだけな。それじゃあブラは隠しきれてないというか、見せる気満々だろう。透けて見えるし。てか、ズボン穿いてないのが一番の問題だろう。

「うー穿けばいいんでしょー。夜君のバーカ。」

そして、穿いたのはズボンではなくどこからともなく出したミニスカート。残念ながら隠そうとしていないのでパンチラどころかパンモロである。

ゴホンと一つ咳払いをして咲魔が切り出した。

「えっと、只単に、大神から飛ばされたのが現代だったから、ここに居る訳だけど。大神の命じによって。仕事をすることになったの。

」

「仕事？俺はバイトやってんだけど。」

「魔装探偵。夜君には悪いけどバイト止めてもらわないと。いけないよね。」

「そう。悪いけど、大神には逆らえないから。シャルと朝儀は今仕事のはず。」

「で、仕事内容は？」

「普通の探偵と変わりなかったりするけど、怪奇現象を止めたり、妖怪の討伐とかも入るわね。」

う…確かに大変そうだな…。バイト辞めないとどうしようもないぞ…。店長に謝らないと…。

あーあー。俺の平凡はどこへやら…。

「またこの剣で戦えと？」

「無理強いはしない…でも、手伝ってほしい。」

「仕方ないな…店長に謝っとくか…。」

三人の顔がパッと明るくなる。俺が居るだけでみんな明るくなれるんなら、俺だって一肌脱ごうじゃないか。まぁ、無理なもんは無理だけどな。

「で、朝儀とシャルはどんな仕事なんだ？」

「あー、なんでも、とある鏡がいきなりなにもしてないのに勢いよく割れたらしい。不自然過ぎて怖いから依頼されたわけよ。まぁ、大体そんなもんよ。」

鏡が勝手に割れる……。別に身に覚えがあるわけではないが、なんだろうこの悪寒は。

職業：魔装探偵！？（後書き）

鏡が勝手に割れる…まぁ、ネタですよね。
ん？何のネタかって？…。

次回からは、オンドゥル侍さんとのコラボで、オリジナルキャラ、
アレンが登場します！！

キャラクター紹介（前書き）

はい、キャラクター紹介です。★は最大で五つ、最低で一つです。
不備な点があれば言ってください。シキがお応えいたします。

キャラクター紹介

名前：秋吉夜哉（あきよしよるや）

性別：男

能力：反射と向きを操る能力

武器：赤桜・弐式（せきおう・にしき）【片手剣】

特技：反射神経、数学全般

趣味：ゲームセンターに籠ること、フラリと出歩くこと

好き：空気が旨い場所

嫌い：女顔のことにふれるやつ

危険度：★★★

友好度：★★★★★

概要：本作の主人公。誰に対しても友好的で、社交性に優れるが、色恋沙汰に関してはかなり鈍感。だがモテる。何故かモテる。
容姿は、人間から妖怪になったため１９歳から変わっておらず、さらに女顔である。パッと見は女子にしか見えない容貌は、本人はかなりのコンプレックスのようで、いつも紅いパーカーの大きなフードを深々と被っている。
だが、黒のやや長めの艶やかな髪は時として凛々しさを醸し出す。

普段は、赤い目を、魔術で黒に見せている。
人間の時は、数学の教師を志していたが、妖怪化に伴い、夢を諦めるが、実際本人はどうとも思っていないようだ。
能力については、主に向きを操る力を使い、反射の能力は、《全反射の籠手》という武具を呼び出し、装着すると使えるようになる。触れると、あらゆる攻撃や、魔法や、呪術。その他さまざまなものを反射させる武具である。
対策法としては、まぁ人間に対してかなり友好的なので対策はとる必要はないが、怒らせたら大変である。怒らせる方法…書くのもどうかと思うが、仲間意識が強く、仲間を馬鹿にされるのを嫌うため、まぁお分かりだろう。怒らせたら殺されるだろうな、精神的に。その時は危険度が★★★★★になるので注意。

名前：宇都宮咲魔（うつのみやさくま）

性別：女

能力：無限の創造世界※固有結界

武器：刈り取る死痛の二つ鎌【双鎌】（かりとるしつうのふたつがま）

特技：武術全般

趣味：戦闘、料理、運動

好き：夜哉

嫌い：夜哉にあだなす全ての存在、大神

危険度：★★★★★

友好度：★★★

概要：転生してもうた！！シリーズの主人公。夜哉とはうってかわって社交性が高くはない。語尾が「～わ。」とか「～ね。」になっている。元は、ロリータサイズの少女の姿だったが、大神を脅ｈ…大神にお願いしたら運良く２０歳くらいの身長にしてもらったので、髪をポニーテールをといている。

革新者という位置付けで、進化した人類である。能力を使うときや、怒ったときは黒の瞳が光輝く黄金に変わる。そして、身体能力が上昇する。

危険度が高いのは、若干戦闘好きで、武器はどこかしら持ち歩いている。（持ち歩いていなくても創造できる。）なので、喧嘩を吹っ掛けたら、人間だと半殺し、妖怪だと9割殺し、死徒だと殲滅する。くれぐれも怒らせてはいけない。地球そのものがどうなるかしれない。幸いそこまで沸点は低くないというか結構高い。

髪は黒で、赤の小さなリボンを左右に二つ着けている。目は黒。

因みに胸はそこそこデカい。

能力、《無限の創造世界》は、固有結界というそれだけに特化した魔術回路であって、世界を塗り潰すことができる。

無限の創造世界と言うものは、簡単に言うと自作爆弾の無限倉庫である。

物理的なものが空想が現実になる能力で、敵を殲滅するために剣をばらまいたり、小腹を満たすためにお菓子を出したりと使用用途はさまざまである。

また、能力を使わずとも、大抵の魔術が使える。

対策法としては、まず怒らせてはいけない。絶対にだ。もしキレさせることがあるものなら、自分の周りに大量の剣が現れ、ジ・エンドである。

名前：シャルロッテ・フラー

性別：女

能力：なし※魔術は使える。

武器：銃器全般

特技：超遠距離狙撃

趣味：夜哉の背中を遠距離からスナイパーのスコープで眺めること。

好き：夜哉、銃器

嫌い：弾詰まり

危険度：★★

友好度：★★★★

概要：言わずともがな二人目のヒロイン。夜哉に惚れている。真面目な性格だが、生真面目という訳でもなく、社交性に優れ、誰に対しても敬語であるが、仲間内では名前は呼び捨てにしている。
外見年齢は１７歳くらい。髪は金色のウェーブがかった長髪に、栗色の瞳を持つ。
因みに胸は小さくはない。
随分前から咲魔と行動を共にしていて、盛大にボケるチームの良心としても活躍。

能力はないが、魔術が使える。しかし、卓越した狙撃センスで、遠距離からの精密狙撃は、幾度も活躍している。さらに、属性魔術で弾丸に属性を付加することも可能である。
体力的には、高いものの他のパーティメンバーには見劣りする。
対策法は、取り敢えず敵に回したら厄介である。視認不能の距離からの精密射撃は狙われる方にとってはかなりの神経を磨り減らして回避に徹してもギリギリ急所から逸れる程度であるから、敵に回すのは危険である。しかし、友好的で基本的に喧嘩はしないので安心である。

名前：水無穹（みずなしそら）

性別：女

能力：幻惑能力

武器：素手

特技：家事全般

趣味：ショッピング

好き：夜哉

嫌い：勉強

危険度：★★★

友好度：★★★

概要：三人目のヒロイン。夜哉に対してド変態。どうしてこうなった…。
まぁ、本人としてはスキンシップなだけなんだろうが。過度すぎる。その強さイコール夜哉の大好き度と考えれば納得はいくだろう。気づかない夜哉も夜哉である。
容姿は、空色のショートヘアに、随一のスタイルと、少々女の子だと嫉妬してしまう体型である。胸は適度にデカい。
さらに、２０歳から妖怪かしたため永遠の２０歳である。羨ましい。因みに、妖怪化に伴い黒の長髪から空色のショートに変化したのである。眼の色は緋色。
夜哉に対してお姉さんの態度をとっている。確かに外見的に丁度良いが…。因みに、夜哉のことを「夜君」と呼ぶ。
能力に関しては、幻惑能力である。幻覚を魅せたり、幻を出したりと、使い勝手が難しいが強力な能力である。最近は夜哉にばかり使っている。効果は媚薬と同じ。しかし、使う度に跳ね返されている。迷惑なだけである。
結局、能力は戦闘に余り用いない。体術での攻撃を主にするが、威力は高いのは仲間内で体術ができる（シャル以外）に教えてもらい、天才的で驚異的なスピードで習得していき、体術は随一の強さになるまでに成長。
対策法としては、近寄らないのが賢明だろう。ある程度の剣の達人が真剣を持って勝負を挑んだとしても惑わされて終わりか体術で完膚なきまでに打ちのめされるだけだ。
刺激さえしなければ安全なので、普通にそっとしておこう。余程不機嫌でなければ襲ってこないはずだ。襲ってきても、お団子奢ってあげると言えば大抵機嫌をなおす。

名前：秋吉朝儀（あきよしあさぎ）

性別：女

能力：体感重力を操る能力

武器：紅球（こうきゅう）【武器ユニット】

特技：料理、運動

趣味：散歩、ジョギング

好き：夜哉

嫌い：取り敢えずヌルヌルしたもの全般

危険度：★★★★

友好度：★★★

概要：四人目のヒロイン。夜哉の妹ではなく、夜哉そのものの裏の存在。戦闘時には残虐性を発揮し、咲魔とタメを張れるだろう。
容姿は、紅色の髪で髪型はおさげにしている。目は赤色。胸は…触れてはいけない。
平常時は、先程記した通り友好的であるが、戦闘時に危険度が★★★★になる。ので注意が必要である。能力について、体感重力というのは、自分にかかる重力のことで、地球から受ける重力を無理矢理引き剥がして、方向を自由自在に変えることができる。
例えば、真横に壁があったとする。それに向かって重力の向きを動かせば、壁に立つことができる。と言うものだ。
武器ユニットの紅球というものは、元は半径１０?程度の真紅の球

であるが、念じて魔力を通すと、形状を変化させることができるという万能武器である。もちろん球のまま投擲にも使えるし、遠隔操作も可能である。
対策法としては、まずは友好的な態度をとろう。刺激したら速攻戦闘モードに入るからである。敵に回すのは危険である。肉片さえ残してもらえないかもしれない。まぁ、弱いもの苛めはしないだろうが…。

ここで万年筆を止めた。仲間についての書物を書こうとしただけだからな。自分のプロフィールなんて書くのもどうかと思うしな。でも、なんか寂しいよな。やっぱり、自画自賛も甚だしいが、自分のプロフィールを書くことにする。若干恥ずかしいが仕方がない。これは私の宝物にする予定だからな。

名前：宇都宮シキ（うつのみやしき）

性別：女

能力：獣化（ナノブラスト）

武器：近接武器ならなんでも。

特技：武術全般

趣味：ゲーム関係

好き：夜哉

嫌い：大神

危険度：★★★★

友好度：★★★★★

概要：この書物を書いている当人。最後のヒロイン。
社交的でどんな人にも友好的な態度をとるが、内に秘めた獣の闘争心は拭いされない。ビーストという種族で、特殊能力としてナノブラストが行うことができる。容姿は、黒の長髪で白の大きな帽子を被っている。耳は所謂獣耳で垂れている。そして、瞳は真紅だ。
外見年齢は１８歳。胸は穹に次ぐ。
武器は全て使用可能で、特に二刀流、槍、二爪をよく使用する。
レベル的にはかなりの使い手でも軽くあしらうことができる程度。
腕力には自信あり。
夜哉に惚れていて、一緒にゲームはするが、思いは伝えきれなくて悪戦苦闘中。というか早く気づけバカ。
対策法としては、取り敢えず友好的なのでじゃんじゃん友達になってもいっこうに構わない。
よくゲームセンターで格闘ゲームをするので、乱入してみよう。数秒で倒されます↑自分で書いて恥ずかしくなった

「ふぅー、なかなか疲れるなこれ。」

自分のプロフィールはやたら短くなった気がするが気にしてはいけない。恥ずかしいのだ。
万年筆はもう片付けて、この書物のタイトルを毛筆で書くことにした。
水を注ぎ、墨をする夜の１時。

「よし、書くか。」

心頭を滅却して一文字目に気合いをいれる。
静かな筆の音が響く。
ただ、さらさらとさらさらと流れるようなリズムに乗って。
そして出来た文字は。

【夢幻史記】

キャラクター紹介（後書き）

さて、プロフィールも終わり、本編に入ります。
前に言ったコラボは次の一話からです。

鏡の中の仮面戦士（前書き）

取り敢えず一話完結。というか、コラボ作品ですの。
オンドゥル侍様、ありがとうございました（＾―＾）／

鏡の中の仮面戦士

朝儀ｓｉｄｅ

鏡が突然割れた。気味が悪いから調べてほしい。
これが私とシャルに来た依頼。正直、調べようが無いって事だけが確かである。
霊の類いかとたかをくくっていたものの、霊的反応はないし、別に問題はなさそうなんだけど…。依頼人がいっていた中から影が見えて、人を拐っていったという本当かどうかも定かでない情報が何やら引っ掛かる。というか、魔術の類いではなく鏡の中に移動できる手段があるとすればそれはそれで問題であるのだ。

「はー、手も足も出ないね…。こちとら雲を掴むような…。」

「でも、やっぱり何か引っ掛かりますよね…。なんかありそうで…。」

シャルとは全くの同意見である。なんかありそうでないなんて気もしてきた…。

「あー！！何にも解んないー！」

「落ち着いて下さい朝儀。冷静にならないと解るものもわかりません。」

そういうシャルも、苛立ちを隠しきれてない。そう、先ほどから魔方陣を展開して複雑な解析をしているのに何もわからないのだ。

「……うー、わかってるよぅ…。しっかし、魔力が働いてないとするとこちとらお手上げじゃ……。」

一瞬、鏡の中に黒い影が見えた。シャルも同様に何かを見つけたようだ。

補足だが、壊れた鏡は元通りに修復している。

「今の…。」

「ええ、確実に何か居ますね。」

その瞬間、鏡の中から触手が現れ…。

「なんでさっっっ！？」

私は鏡の中に引きずり込まれていった。

「朝儀！！」

シャルはそこに取り残された。

私は、体制を崩していて上手く攻撃体制に入れていない。さらに…。

「し……触手きもぃ……。」

触手は超苦手である。それが手足を絡めとっていると思うと…。

「う…うぅ…ぬるぬるする…もう無理。」

抵抗する精神力もなくした。

「うおおぉおお！！」

私を束縛していた触手がほどけていく。男の声がした方を向くと、全身装甲の男が二人、剣を持っている。

「うげー、キモかった…って、来んなっ！！」

右手を出して、全力の火球を放った。

怪物…タコ？はうめき声をあげながら悶え苦しむ。

だんだんと楽しくなってきた。手加減して火力を調整。

因みに全身装甲のナイスガイは後ろで唖然としている。

「は……ははっ…あはははっ！！」

後ろにいるナイスガイたちも、この期を逃すまいと必殺技を仕掛けることにしたようだ。

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

必殺のライダーキックが炸裂する。龍と同時に突進したそれは、怪物を一撃で破砕して爆散させるだけの威力を秘めていた。

奇声をあげた触手はグッタリとして消滅していった。

「う…うぇ…。ベトベトが若干付いたし…死にたい。」

ナイスガイ×２が駆け寄ってきた。一瞬で装甲を解除すると、赤い方は今時のツンツン頭をした男。もう片方は、ツンツンなのに変わ

りは無いが、黄色い民族衣装を着て、同じようなデザインのヘアバンドをつけている。なにやら説明しずらいが、とにかくなんかの民族だろう。

「お、おい。大丈夫か？」

「……ベトベト超キモい。泣きたい。」

私が涙眼で言っているのになぜ彼らは挙動不審なのだろうか…。ハンカチプリーズ。私の有るけどベトベトつけたくない。

すると、どこぞからもう一人走ってきた。そいつも全身装甲だったが、解除して男二人にならんだ。

黒の長髪で片眼に眼帯をしている。

というか、今さらだが何故私は理由なしにコイツらに気を許しているのか…。

ベトベトが付いた辺りは不快感抜群だが、幸いにも左腕だけだから心配ない。私はあくまでも自然体でどんな攻撃にも対応できるように構えている。

「はぁ…はぁ…。アレン、ユート。リア充を見つけたにしても、暴走しすぎだ。戻る方法は考えてあるのか？」

リア充？暴走？意味がわからない。取り敢えず警戒レベルを上げる。

「おねえさん、追いかけてきたのか？」

「当たり前だ！！それに、警戒されているではないか！」

「いや、俺たちは取り敢えず助けたつもりなんだけどな。」
半分呆れてきた。仕方がない、こちらから話しかけるか。
「見ず知らずの男に近寄られて警戒しない女はいない。名を名乗れよ。」
睨んだままトーンをおとして言う。
「あぁ、それもそうか。てか、俺はこの状況で冷静でいられる人見たこと無いぞ。」
「うるさい。名乗らないなら殺す。」
殺気を充分だして完全警戒モードに入る。何かあれば瞬時に対応可能である。
「あ、あぁわかったって。俺はアレン・クラウド。仮面ライダードラゴンナイトだよ。頼むから警戒を解いてくれ。」
ツンツン頭はアレン。
更に、後の二人も名乗った。民族衣装の少年はユート・ユン・ユンカースで、仮面ライダーストライク。黒髪の少女はナギサで仮面ライダースティングというらしい。
「……私は秋吉朝儀。鏡が突然割れた、気味が悪いから調べて欲しいって依頼が来たから調べたらこのありさま。どう責任とってくれるわけ？気に入ってた服に粘液が付いたんだけど。とれないし。」
責任のとりようもないし、とる必要さえ疑わしいが、大嫌いな触手

＋粘液に自制がつかないくらい軽くイライラとしている。

「いや、責任…っつってもな、…鏡の外に帰すくらいしか出来ないけど…。」

それはそうだろう。しかしやはり朝儀は苛立っていた。それにも苛立っていたし、一瞬胸を注視してナギサの胸を観た二人の男に苛立っていた。

「……。一回死ぬか？」

自分の胸を見下ろした。何のことはない。小高い丘などなかった。

「へ？」

自分に比べてナギサとやらは随分とまぁ着痩せするタイプらしい。妬ましい。

「さっさとこっから出しなさい。話はそれから。」

「あ…あぁ。……アレン、ユート。お前らなんか怒らせるようなことしたのか？」

ナギサのひそひそ話に二人は全力で首を横にふった。

鏡の世界（ベンダラというらしい）から出た。

外で心配して待っていたシャルが駆け寄ってくる。

「あ、朝儀！！大丈夫でしたか？怪我はないですか？」

「あー、別に怪我はしてないよ。……でも、死にたい。」

「え？……あー、ドンマイです…。」

まぁ、先程までは強がってはいたのだが、限界。涙眼になってきた。

「朝儀、お気を確かに。あの方達は誰ですか？」

「……ふぇ…変態。」

「違え！！」

「否定するなら胸を見るのを止めてもらえませんか。風穴をぶち抜きますよ？」

表情と口調は穏やかなのに急に寒くなったのは、シャルが出したアサルトライフルのせいだろう。

「おいおいおい。待て待て待て待て！！俺たちは何も！」

次の瞬間、ユートが爆弾を投下した。

「大丈夫だ朝儀！！貧乳が好きな人も居るんだぞ！！」

「「「あ…」」」

「あぁ？」

ゆらりと朝儀が立ち上がった。いつのまにか粘液は消散しているが、体を通してでる力が見えるようだ。

完全戦闘モードに移行した。誰も彼女を止められない。

「「バカユートォォオオオ！！」」

朝儀の右手の中には紅球が収められていた。グニャリと形状が変化、ナックルに変化した。

「殺戮開始。」

「自業自得ですね。仕方ないです。」

アレンが悲壮感たっぷりにカードデッキをかざすと、変身ベルトが形成される。カードデッキを変身ベルトに装着。そして。

「ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ！！」

仮面ライダードラゴンナイトに変身した。
隣でユートも仮面ライダーストライクに変身。
ナギサは、渋々というふうに仮面ライダースティングに変身した。

地面を蹴って、朝儀がまず獲物にしたのは仮面ライダーストライク。
重力も操り、最速の拳はベノサーベルに受け止められたが、そこから蹴りに派生する。

「ぐあっ！！」

怪力にストライクは吹き飛ばされ、近くにあった倉庫に叩きつけられる。
が、後ろからドラゴンナイトが、ドラグソードで突っ込んでくる。

しかしナックルが同程度の早さかつそれ以上の早さで迎撃し、弾き防御(パリィ)をする。
さらに、蹴りを入れようとして、背中に衝撃が走る。スティングのアタックベントだ。
エビルダイバーというエイの形状をしたアドベントビーストが背中に突っ込んできたのだ。

「ちっ…ちょこまかと…。」

更に、振り向くとドラゴンナイトがドラグソードを振りかざしている受け身の取りようがない…。

爆音が鳴り響くと同時にドラゴンナイトの手からドラグソードがなくなっていた。５００ｍ離れた場所からアサルトライフルを構えたシャルを視認。

「いい仕事…。」

二人を蹴り飛ばそうとしたそのときだった。
攻撃が止められた。
向こうもストライクのベノサーベルが片手剣と鍔迫り合っている。
私の蹴りは光輝く籠手が受け止めていた。

「なーにがいい仕事なんだ。嫌な予感がして来てみれば…。ふぁー、眠い。」

赤色のパーカーで深々と被るフード。紅の片手剣に白銀の籠手。ここまで来たら誰かは特定できるだろう。

「夜……。」

夜哉ｓｉｄｅ

「で、二人とも退いてもらえないと俺はずっとこの体制なんだけど？」

右手で朝の蹴りを受け止めて左手の赤桜・弐式で変な装甲の剣を受け止めている。まぁ、俗に言う仮面ライダーって奴で間違いないよな。俺も子供の頃見たぜ。

んで、右手がすっげー痛いの。こいつ本気で蹴りやがったからな。正直右手がもげるかと思ったぜ。

それと、問題なのが何故俺が朝に視線を向けないかだが…。朝はミニスカートを今穿いてんの。あとは想像にまかせます。

「えっ！？あっ…よ…夜！？どっ…どう…。」

よし落ち着こう。謎言語を紐解くにはまずは落ち着きが重要だ。

「おいおい落ち着け、それと足降ろせ。」

「え？あ…はぅ…。」

「で、あんたらは何者だ？鏡を割りまくるテロリスト？はた迷惑だな。割れたのが一枚で済んだ幸運。」

「あぁ、すまない。戦わずにすむならそれで良いんだ。」

変身をといた黒髪の少女が言った。

「そりゃいいや、なら状況説明頼むわ。」

――――

「なるほど、そこの男二人の暴走が原因というわけか。リア充がどうとかっつーのは置いといてだ。」

コホンと一つ咳払い。

「あんたら、グラールに帰れんの？」

グラールという太陽系については、シキや咲魔、シャルが以前住んでいたと聞いていたし、文明とかも聞いていたからなんとなく理解できるが…。

まぁ、ベンダラっつー鏡の世界を通って来たんだからそこを通ればいいんだろうが。

「あぁ、アレンとユートを引っ張って行けばなんとかなるだろう。」

「そっか。なら、安心だな。」

「すまないな。迷惑をかけて。」

「いいってことよ。んじゃ、またな。」

またな。というのは、いつかこちらからグラールに行ってやろうと思う。咲魔達のもう一つの故郷だからな。

「あぁ、本当にすまなかった。」

ナギサは、二人を引っ張ってグラールに帰っていった。そして、鏡に入る際に。鏡が粉々に砕け散った。

「あ、そゆこと。」

「ここまで粉々だと…修復不可能ですね…。」

新しい鏡は自前だった。

鏡の中の仮面戦士（後書き）

一話完結って以外と悪くないですね。
話が始まるまでこれでいいかな…（´・ω・`）

暇をもて余した神々の天★地★創★造（前書き）

はいミジケェー（、・ω・、）
初めての一次だからこういうこともあるｗｗ

暇をもて余した神々の天★地★創★造

大神ｓｉｄｅ

「うむぅ…最近面白くないのぅ…。」

大神は、机の上のパソコンで神々の集会の為の書類作成をしていた。慣れた手つきのブラインドタッチである。まぁ、これは大神が暇を埋めるためにインターネットに繋いでＴｗｉｔｔｅｒをしていたら勝手に打てるようになったのだが。

「それにしても…まさかバレてしまうとはのぅ…。」

民間人を勝手に神の意思で形だけでも操作するのは問題である。神は思い通りの世界を創るのではなく、世界を創る人々や動物達などを見守る存在なのだ。
それなのに、大神の一柱であるにもかかわらず、人を操作していたのだ。運良く最高神は赦したが、あってはならない事である。

「パソコンは眼が疲れるのじゃー。」

意味もなく伸ばした足をバタバタとさせる。
外見が完璧な銀髪ロリータなので、見るものによってはお持ち帰りレヴェルの可愛さであるのだが。

「大神様、ホットココアをご用意致しました。」

「すまんのぅ。ときに神ちゃん、天地創造って憧れるよね。」

「はぁ。」

うーむ、と右手でパソコンを打ち、左手でココアを飲みながらウーンと唸る。

「しかし、天地創造するには明確な理由はあるのですか？」

素朴な神の疑問である。

「ないのぅ。」

即答した。速答である。

ついでだが、この大神は他の神々よりも力が強く、やる気になれば天地創造など容易い。

しかし、無断で天地創造をしたら…。

「最高神（パパ）に叱られるのぅ…。」

そうは言っても、何かと最高神は愛娘である大神に甘い。甘ったるい。今川焼のカスタードクリームよりも甘い。俗に言う親バカである。多分そこまで悪いことではないので大神のする天地創造も笑って流すだろうと神は予想した。

「神ちゃん。我は暇なのだよ。」

「暇…ですか。」

「うむ。いくら不老不死とはいえ、人生に潤いがないと精神は死ん

でいくのじゃよ。」

因みに大神は十世紀近く生きている。

「足でＤＤＲをしながら書類作成をしている大神様は暇であると仰るのですか。」

「よっしゃフルコン。」

大神は澄ました顔でゲームを続けている。

机の足元には専用のコントローラが置かれているのだ。

「大神様、百年も部屋に籠っていると最高神様もご心配になられてますよ。」

「パパは心配性じゃのぅ。仕方あるまいて。今日は久し振りにドッヂボールチームに混ざろうかの。」

「あ、私今日はドッヂボール休むことにしました。」

天界のサークルみたいなものだ。ドッヂボールといえば二世紀程前、大神と最高神が参加したときに、ボールのあまりのパワーに他の神々の負傷者が続出したという伝説は今もなお語り継がれていて、記憶に新しいのだ。

「神ちゃん来ないのかの…。むぅー、じゃあ外出はやめじゃの。」

ぐでーと項垂れたままパソコンをカタカタと打つ大神。頃合いと思い、退出しようとしたそのときだった。

神ちゃん（中間管理職の八百万神）は宙を舞った。

「きゃあああっ！？」

「神ちゃん！？…。」

ドアを思いっきり蹴飛ばして開けたのは銀髪イケメンである。神ちゃんに悪びれる風もなく「悪い。」というと、大神に向き直った。

「あ…あーゆーパパ？」

その瞬間、イケメンパパの顔が慈愛に満ちた聖母のような微笑みを浮かべたが、同時に駄目パパである事実が娘である大神に再びふりかかった。

「愛しの俺の娘よっ！！」

抱擁（と言う名のボディタックル）が届く前に顔面に蹴りを入れた。

「パパ…自重せぬか…。」

「おうふ…これが巷で噂のスキンシップとやらか我が娘よ！！」

神ちゃんはドアにぶつけて赤くなった顔をさすりながら心の中で「全然噂になってねー。」とツッコンだ。

「そんなもな噂になどなっておらん！！それにスキンシップでないぞ！」

後ろに回ったパパは、大神の胸を触った。

「おーう、我が娘よ。胸は然程成長してないようだな。だがそれがイイッ！！」

「こんの……。」

神ちゃんはヤバイと思った。しかし、時すでに遅し。必要最低限の防護結界を部屋の物に張った。

「エロ親父！！」

大神の周りに火柱が立つ。地鳴りが響いて、部屋に反響する。さらに部屋の壁は吹き飛ばされ、外から凄惨な光景が丸見えになる。自重しないパパラッチ天使は火柱に巻き込まれて撃墜された。

「ふぅ、我が娘よ。俺はそんなんでも傷一つつかんぞ。お前の大好きな神ちゃんはどうか知らんけどな。」

「だ…大好きとかじゃねーし！！胸触んなし！超キモいし！」

「き…キモ……ｏｒｚ」

イケメンで通っていた最高神は、娘に放たれたキモいしの一撃に撃沈した。

「最高神様…お気を確かに。大神様も内心は貴方の事が好きなんですよ。きっと。」

耳打ちをすると。最高神は復活した。

「う…うわ。いきなり復活したのじゃ…。」

コホンと一つ咳払い。最高神は本題に移った。

「俺は天地創造をしようと思ってるのだが、我が娘である大神に助言を求めようと思ってな。」

「パパ、それなら別次元を用意するのがよいぞ。」

期待していた話題がいきなりふりかかり、大神はニヤリとして言った。

「何故？」

「面白いからじゃよ。パパはもう我が操作していた人間を知っておるな？」

「うむ。」

大神はニヤニヤしながら引き出しの中から一束の書類を取り出した。

「我のＩＮＳＡＮＩＴＹ計画じゃよ。どうじゃ？イカすじゃろ？」

書類を受けとると、最高神は口許をニヤリと歪めた。

「最高だ、流石我が娘。この計画は面白い。では始めるか『神遊び』の始まりだ！！」

暇をもて余した神々の天★地★創★造（後書き）

いっつも悩み所ですよね、後書きって。（、・ω・、）

えっと、大神のスペックは咲魔を軽く凌駕しますね。

神様公式チートｗｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1904z/

ＩＮＳＡＮＩＴＹ

2011年12月19日21時01分発行